

ワークショップ

雑誌『比較教育学』---40年以上にわたる貢献

*Comparative Education* Routledge/Taylor & Francis Group ---

-Over 40 Years of Contributions to the Field

中島千恵：翻訳

上田：今日は、このような机の配置になっていることでお分かりのように、一方的に前の先生がお話になるというのではなく、いろいろ問題提起をしていただきながら、我々も感じるところ、疑問に思うところについて意見を出しながら議論をしていきたい。

クロスリー：こんにちは、今日はインフォーマルな形でお互いに意見を交換しあうという形で進めていきたいと思う。本日はアカデミックジャーナルの出版プロセスを、特に *Comparative Education* (以下 *CE* と省略。雑誌名である意味でイタリックで表記) に焦点をあててご紹介したいと思う。

プロフェッショナルなジャーナル、特にこの *CE*、そしてその他の比較教育学の学術誌に投稿する際にお役に立つと思う。今日の午後の全体像として、まず、*CE* をはじめとしたその他の学会誌への投稿に関するプレゼンテーションをし、小休憩の後、*CE* の発展史を述べる。

ここにあるのは、最近の *CE* とパンフレットである。最新号は 2006 年の 5 月号である。それぞれ 3 部あるので、これとパンフレットを日本に置いていく。

*CE* は 42 年の歴史をもっていて、どの国際誌と比べても長い歴史を持つジャーナルのひとつである。1964 年に始まり、いかにこのジャーナルが発展したか、その発展の歴史を今日の後半部で述べる。今日では *CE* は比較教育学の領域における先駆的ジャーナルとして認識されている。一年間に 4 度発行され、そのうち 2 度は特定のテーマに関する特集となっている。例をあげると、みなさんのうちどなたか哲学に興味のある方があれば、2003 年の特集がある。また、ポストコロニアリズムに興味のある方は 2004 年の 40 巻、第 2 号がある。国際的に高い評価を得ている学術誌に投稿したいと思っている方には、*Social Sciences Citation Index* と呼ばれる国際的なシステムがあるが、*CE* はそのシステムに含まれている。

みなさんのどなたかが、昇進などに使うなら、この Social Sciences Citation Index は非常に役に立つ。

本日の講演の目的は、こういったすぐれた定評のある学術誌がどのような経過を得て投稿され、レフリーがつけられ、そして出版されるのかということ述べることにある。このことは、これから投稿されるみなさんに非常に役立つと考えられる。可能な限りいろんな質問も受けたい。

国際的な査読システムで動いており、エディトリアルボードは非常に国際的に定評のある方々で組織されている。現在エディトリアルボードにいるブロードフット (Patricia Broadfoot) は、ブリストル大学に在るが、もうすぐグローセスタ大学の副学長に就任する。そして、その他のメンバーとしてはロンドン大学のロバート・カウエン (Robert Cowen)、同じくロンドン大学のアンジェラ・リトル (Angela Little)、オックスフォード大学のデイビッド・フィリップス (David Phillips)、ドイツのフンボルト大学のユルゲン・シュリーパー (Jurgen Schriewer)、バーミンガム大学のミッシェル・シュバイファース (Michele Schweisfurth)、ダラム大学のジュリアン・エリオット (Julian Elliott) である。

ジャーナルはどのようなことをしているのかと言うと、教育のすべての側面についての multi-disciplinary studies を行っている。それは、地方レベル、国家レベル、地帯レベル、地球レベルのコンテキストにおけるすべてを対象にしている。ガバナンスと政治、マネジメント、社会学、ITを含むテクノロジー、政策研究、国際開発などの多くの領域からの投稿が可能である。

また、2つのダイメンションがある。ひとつは理論や方法論に関連するダイメンションで、もうひとつは政策や実践と関わるダイメンションである。レフリーは、両面を少しずつ期待する傾向があり、理論的な側面と現実の政策分析との関わりを論文に期待する。よって、以下の基準が投稿論文の成功に関わっている。論文投稿の際には、これらの基準にかなっているかを検討していただきたい。すべての査読者が同じように、それぞれの項目に注目している。投稿される際には、論文がこれらの基準にかなっているか検討していただきたい。すべての査読者が同じようにこれらの項目をチェックする。

第1は理論的深さ (theoretical depth) があるか。第2に批判的洞察力 (critical insight) を持って問題に取り組んでいることである。ただ描写的に何かを調べてものではなく、著者自身の批判的な洞察的議論が求められる。

第3に、これが基本的に比較教育の学術誌であるから、明瞭な形での比較 (explicit comparisons) が求められている。しかし、比較と言ってもいろいろな形がある。たとえば、国と国とのダイレクトな比較とは限られずに、たとえば同じ国の中での地域比較、貧しい地域とそうではない地域との比較などもある。国と国との比較と限らず、日本と世界の学会における潮流を比較するというか反映するという形も比較の一種として認められる。

第4の基準としては、オリジナリティ (originality) である。今までに述べられた事のない新しい考え方なりアプローチがあることである。

更に、重要なのが第5に適切性 (relevance) である。取り上げているトピックがこのジャーナルにふさわしい内容であるかどうか基準になる。これは非常に大切で、しばしば投稿される論文の中には非常に優れてはいるが、比較教育学というこの分野にはふさわしくない、むしろ心理や成人教育に関するジャーナルに投稿したほうが良いような論文もある。エディターとしては非常に心苦しいが、投稿を拒否して論文を返却する際には、「あなたの論文は非常にいいのだが、たとえばジャーナル A や B に投稿してはどうか」という返答をつけ加える。

第6の基準は明確さ (clarity) とアクセスビリティ (accessibility) である。世界の読者に対するアクセスビリティである。このジャーナルというのは世界的に普及しているジャーナルなので、どんな大陸の人、どんな国の人でも読むというそういうどんなところの人にもアクセスブルな論文を書き提供したい。いろんな大陸のいろんな立場の人が読んで読みやすいということを言っている。非常に良くあることだが、論文としての達成度もリサーチもしっかりしている、ただ非常に難しく何を言っているのかわからないのがある。特にインターナショナルオーディエンスにとって、なかなか理解できない論文で書き直しが必要なものがある。しかし、エディターやエディトリアルボードが書き直すわけにはいかないの、書き直すように言って論文を著者に戻す。するとそのようにつき返された著者というのはどうしても意気消沈してしまって、書き直して再投稿することはない。これは残念なことである。よって、論文を投稿するときには何度も読み直し、何度も修正して投稿していただきたい。そうすることによって、ひとつの論文の美しい流れができる。

以上が査読の基準であるが、ここで論文の採択率を想像していただきたい。平均すると5%から10%の採択率である。時にはトピックやテーマによっては15%になるときはあがあるが、いずれにしても80%以上の論文が結局は拒否されていることになる。となると、採用されるのはむつかしいなと思うだろうが、確かに数字だけを言うと難しいが、今述べた基準をきちんとカバーしていればずっと確率は高くなる。こういう基準を考慮していない論文は採用されないわけで、それが80%以上という大きな数字の中に入って行く。内部の人にだけ明かす、今述べたような基準、様々な立場の人が読める (accessible) , オリジナルな視点がある (original) , 批判的洞察を含む (critical edge) , 良く構成されている (shape it well) , 文章全体が磨かれ、洗練されていること (polish it) を満たせれば、掲載されるチャンスはずっと大きくなる。

上田：世界の人々に読まれているということですが、どれくらい講読されているのですか。

**クロスリー**：年間の定期講読ということでは 800 から 900 である。これはイギリスをベースにしているアカデミックジャーナルとしては非常に高い講読率である。他にご質問は？国際誌に投稿する手始めとしては、ブックレビューなどが良い。

**柴田**：エディトリアルボードのメンバーはどのようなプロセスで、どのような基準で選ばれるのか。この質問をするのは、かつて論文をあるアメリカのジャーナルに投稿した際、3 人の査読者からコメントを得たが、ひとりの査読者から学会誌の査読者としては不適切だと思える言葉でコメントが返ってきた。それに対して、イギリスのある研究者から苦情を書いたらどうかというアドバイスがあった。結局、エディトリアルボードが変わったので、新しいボードの人たちが、今までペンディングになっていた論文をどうしますか、修正して出しますかと言われた時に、その人物をクリアしないことにはそのジャーナルには絶対掲載されないと判断し、すぐにジャーナルを変えた。変えたジャーナルですぐに受け入れられ、出版できたのだが、そのような経験からこの質問をしている。

**クロスリー**：エディトリアルボードにいる研究者が査読をする場合もあるし、このエディトリアルボードの中のサブコミティのような形で国際アドバイザリーボードが控えている。トピックによってはこういう人たちに意見を請うことがある。もしくは、このエディトリアルボード、国際アドバイザリーボードにいない、外部の人に批評を請うこともある。どのジャーナルにもそれぞれの著名な学者からなるエディトリアルボード、国際アドバイザリーボードの非常に長い名前前のリストが彼らの専門とするテーマとともに載っている。そのリストは潜在的な外部査読者のソースにもなる。このようなリストに名前が掲載されている学者達は世界中に住んでいて、彼らがジャーナルから査読を依頼される場合には、きちんとしたかたちでの査読のガイドラインと基準が示されているはずである。それらのガイドラインの 1 つには、筆者が査読者のコメントを積極的に受けとめられるように、投稿し直そうかなという気持ちを奨励できるように、建設的な批評をお願いしますということが含まれているだろう。原則的には査読者は論文の中の非常に良いところを生かしながら、さらに良い論文を掲載していくということにあるだろうと思う。基本的にはそれが査読の過程の精神であろうと思う。

評価には 4 段階あり、そのまま掲載、マイナーな修正で掲載、大きな修正で掲載、そして拒否の 4 段階である。そのまま掲載という例は非常に少ない。査読者は何らかの修正を示唆してくるし、その示唆を受けて、その情報をつけて筆者に論文を返すというのが普通である。しかし、時々、査読者が不親切な場合がある。また、非常に希ではあるが、彼らの批判が間違っている場合もあり得るし、不公平な場合もあり得る。人間の成すわざである。通常、エ

ディターは、不適切な言葉や謝った批評がそのまま筆者に返されることがないようにするものであり、そのようなことがあってはならない。

インサイドストーリーを語るような、他に何かご質問は？

**望月：**ある学会の編集委員長？をしている。査読者の間で意見が分かれたとき、どのように対処されるのか。

**クロスリー：**私の心を見透かしておられるのか、ちょうどそれは私がこれから話そうとしていたことである。

非常にトリッキーなケースであるが、希ではあるがそのようなケースは起こりうる。査読者がトピックに関して独自の意見をもっている時などに。そういうときは、このCE場合どうするかというと、別の人に第3の意見を聞くことにする。方向としては、知的な観点でそれぞれの接点を見いだすという方向をとる。当然、そのトピックに対しては、様々な観点があり得ると思う。出版する側はしばしば異なる見解を提示する論文を掲載したが、査読者の意見と対立しながらもやはりその論文を掲載する合理的な理由がある。

皆さんはこの問題をどのように解決しておられるのだろうか。

**望月：**査読者の中に責任者を決め、その責任者がトータルな判断をする。その判断が妥当なものであるかどうか、投稿者との関係で再度、リニューアルして、そこで委員長に提出する。

**フロア：**しかし、その結果を委員長に言ったって、委員長の独断で決められないから、そこがひとつ問題である。

**望月：**ですから客観的な基準というのはとても難しい。

**クロスリー：**このディスカッションは有益であるということがこれでわかると思いますが、それぞれのジャーナルによってシステムや考え方が違うということがよくわかる。CEは非常に他と異なるモデルを持っていて、我々は外部の人にも査読を依頼するが、提出されたすべての論文は8人のボードメンバー全員によって読まれる。そして、会議を開き、それぞれの論文について批評なりを交わすことにしている。そういうシステムにすることによって、8人のボードによるミーティングがいかに知的に白熱した議論がなされるかということを想像していただけたらと思う。非常に人々の時間と努力が注ぎ込まれている。全員のボードメンバーがミーティングを開いて、それぞれの論文に関して批評を交わすということをしている。

そういうシステムによる評価をすることによって、8人のボードによるミーティングがいかに知的で白熱した論議が行われるかご想像されると思うが、そのプロセスには非常に多くの時間と労力が注がりこまれている。そして、これらの著名な人々との議論は、時間はかかるが有意義で報われる作業である。

**質問：**全員が全部の論文を読むのか。

**クロスリー：**そうだ。とても大変な仕事である。時々、エディターが投稿された論文をスクリーニングする。これはどのジャーナルでもあることである。この雑誌に全く合わない論文もあり、それらは適切なアドバイスとともに筆者に送り返される。

**質問：**1年間にだいたい1人が何本くらいの投稿論文を読むのか。

**クロスリー：**1年間に3回のボードミーティングがあり、毎回、おおよそ15-20の論文を読む。年間、60くらいになる。全員が同じ論文を読むが、いくつかはスクリーンアウトされている。それらはこのジャーナルの意図を全く理解していない論文で、エディターがスクリーニングする。

**質問：**投稿者とレフリーの関係性についてであるが、投稿者が明らかに誰かわかる場合がある。情実が入らない、客観性を確保するために、それは避けるべきだと思うが、そのあたりはどうか。

**クロスリー：**どれも人間のやることですから、客観性というのは目的としても現実的には難しい。が、出来る限りの努力はする。16年間、CEのボードメンバーをし、そしてそれ以前にパプアニューギニアで他のジャーナルの編集を5年経験しているが、人間関係などということもあろうが、基準をきちんとマスターしていれば、基本的にはエディターというのは出来る限り吸い上げようと、出来る限り論文を投稿してもらおうという方向で考えているので、レフリーとの関係ということより、基準をインテレクチュアルにきちんと守っていくという、そちらの方が大事だと思っている。

**クロスリー：**では、書評のほうに話を戻していきたい。新しい新刊本に関する情報である。CEでは、毎回、8~9冊の新刊書が紹介される。昨日の発表にも関係あるが、Citizenship and Language Learning – International Perspective が2006年に紹介されている。これから投稿しようとする人にも、この欄というのはこれからどんな論文が掲載されるかを知るのに非常にいい情報を提供してくれる。しかし、書評欄というのは、ジャーナルのほうから書評をお願いすることなので、一般の方々が自分自らこの書評に投稿するということはない。書評を載せたければ、いきなり自分で投稿するのではなく、ジャーナルの方に自分はこれこれの書

評をしたいと申し出れば、そこからエディトリアルボードからの招待という形で書評が掲載されるということがある。

比較教育には世界にいろんな学会があり、たとえば、CIES (Comparative and International Education Society) , CESE (Comparative Education Society in Europe) , ANZCIES ( Australian and New Zealand Comparative and International Education Society) などがある。ここにあげた3つの学会は、それぞれのジャーナルと提携を組んで、その学会の会員になれば特別価格で購読できるというふうなことが行われている。具手的な例としてはこの3つの学会である。イギリスの比較教育学会に関しては今交渉中であるが、たぶん、実現できる。たとえば、イギリスの比較教育学会の会員であると、今言った *Comparative Education Review* が特別価格で購入できるのだが、正規で購入すると220~230ポンドで非常に高価である。比較教育学会とCEが提携すると1人36ポンドで購入できる。インターネットでも最近はフルテキストがダウンロードできるのもある。いちいちコピーをしなくても済み、非常に便利になってきた。一番最初にあげた出版部数が、このようなインターネットの利用であまり意味が少なくなってきた。出版社もウェブサイトでのダウンロード数、ヒット数、どれだけの人が検索にアクセスしたかという、そういう数字に非常に敏感になっている。エディトリアルボードも敏感なので、特にどのジャーナルというより、どのイシューが一番注目を浴びたかということにも注目している。大学のネットを通じてダウンロードもできる。

上田：インターネットで自由にダウンロードできるようになると、著作権などの問題が起こるが、それはどのようにになっているのか。

クロスリー：難しい問題である。いくつかの点があったと思うが、まず、著作権の問題であるが、本のように正確にはいかないが、ダウンロードできる契約をとった機関としてのレートがあり、それは非常に高くして何百ポンドもするが、機関が払ってくれる。

次に余談になるが、カバーレターが一番最初のところに、このジャーナルは何なのかということが書いてある。投稿するときには必ず、それを熟読してほしい。著作権については、ここに詳しい内容が書いてある。あなたの論文が受け入れられた時には、出版社から著作権に関する契約書があなたに送られてくる。その著作権にあなたが著者としてサインする。

クロスリー：休憩のあと、42年間という、学術誌としては長い歴史を持つこのジャーナルの歴史について語りたいと思う。

上田：今日は、ジャーナルの42年間の歩みというものを中心に比較教育学なり、それに関連する領域の研究の流れ、あるいは傾向などを理解できると思い、大いに期待したい。また、これだけの人数なので、先生のお話の途中でもさえぎって質問をしても結構かと思う。それは国際的にはおかしいことではないので、大いに質問していただきたい。

クロスリー：昨日は比較教育学の分野、研究の未来を見据えた話であったが、今日はどちらかという過去にさかのぼった話をしたい。そして、これはジャーナルと分野全体の過去も振り返ってみたい。過去を振り返ることによって、現在の状況がわかってくる。私自身、ジャーナルの歴史を遡ることにより、現在、このジャーナルがどのように機能しているかや、今までの変遷を知ることができ、歴史的経緯を研究するという事は非常に面白いことだと思った。

この歴史を遡るというプロジェクトにはもう2人おられて、前エディトリアルボードにおられたブロードフット教授、それからブックレビューアーのシュバイスフォース博士である。今日ご紹介するプレゼンテーションのベースになっているのは、今ドラフトになっているこの論文なのだが、これは来年、本の一部になる。その本はラウトリッチから *40 Years of Comparative Education-Changing Contexts, Issues and Identities* というタイトルで出る予定だ。そして、皆さんは私のこの論文の内容を知る最初のオーディエンスである。実は他のエディトリアルボードも中身についてはまだ知らない。また、出版のための最終段階にあり、私がイギリスに戻って最初にするのは、私の机の上にある校正に最終のチェックを入れることである。

この本の他の構成要素としては、過去40年間に掲載された論文のうちから22の論文をとりあげ、その本の章とする。本の目次を見たら今までの著名な学者の名前をご覧になることだろう。例を挙げると、エドモンド・キング (Edmund King)、ロバート・コーエン (Robert Cowen)、昨日お話ししたローレンス・ステンハウス (Lawrence Stenhouse) などの論文もあります。昨日はどなたかが、ジェンダーとか国際開発に関して論文を書きたいのでどういう学者の研究を参考にすればいいのかという質問を受けたのだが、私はUCLAのネリー・ストロムキスト (Nelly Stromquist) 教授を紹介したいと思う。彼女の論文もここに掲載される予定である。昨年、この学会で講演されたボール氏の比較教育に関するすばらしい論文も掲載している。

このジャーナルがスタートしたのは1964年である。1964年10月が第1号だったのだが、当時の購読料は1ポンドだった。現在の200何十ポンドと大きな差がある。当時は年間3号出版されていて、それぞれの論文というのは45から77頁の長さという、非常に長いきちんとした論文が掲載されている。当時の表紙はグリーンだったということは、この調査を始めるまで知らなかった。当時の出版社は、オックスフォードのPergamon Pressだった。最初のエディターはオックスフォード大学のA.T.C.Petersonだった。あと2人のエディターがおり、ヨーロッパの教育が専門のW.D.Hall、もう1人はE.J.Kingであった。エディトリアルボードによる最初の1ページを読んで、ジャーナルには最初から哲学（信念）があったことを発見することになり、知的にとっても興味深いものであった。ここで、一番最初の第1号からその哲学を示すものをご紹介したいと思う。これから紹介する引用によって、昨日から述べているエピステモロジーなどに関連付けられると思う。A.D.C. Petersonの言葉：

We hope to serve the cause and attract the interest not only of comparative education and comparativists, but of education as a whole and its administrators and practitioners (volume 1, number 1, October 1964, p.3.)

(我々は、比較教育や比較教育学者の関心のみではなく、行政官や実践者など教育全体のために貢献したいと望んでいる。)

彼はここでブリッジという表現は使っていないが、ジャーナルの精神としてはいくつかの架け橋になろうとしている。更に、同じく3ページでPetersonは、次のように述べている。

It may not be possible to establish general theories or even individual principles which have a universal validity, but it is clearly possible for educators in one country to make valid inferences from experience in a number of others. It is as a contribution to this field of practical discussion that we have founded *Comparative Education*.

(世界中、どこにでも通用する普遍的理論や原則を樹立することは可能ではないかもしれない。しかし、ひとつの国の教育者達が他の国の様々な経験から価値ある推測をすることは明らかに可能である。我々が比較教育学というこのジャーナルを始めたのは、この領域の実質的な議論に貢献するためである。)

これは当時のピーターソンの言葉なのであるが、現代の言葉に言い換えると、国際的な教育の移植だとか転移といったことについての理念を述べていると思う。つまりは、文化は大切であり、コンセプトは大切であり、他者から学ぶとうことは、直輸入するのではなく、それ

が在るコンテキストや文化が非常に大切であるという、インターナショナル・トランスファーの真髓に触れていると思う。そのような哲学や信念が 1964 年以来変わっていないということも興味深い。そしてそれが一貫性をもっていることに感銘を受ける。*Comparative Education*に限らず、どのジャーナルも独自のフィロソフィーや特徴を持っているので、論文の著者になるにせよ、読者になるにせよ、論文を使うにせよ、ジャーナル独自の哲学を理解するのはとても大切である。また、40 年間で振り返り興味深いのは、哲学は変わっていないが、このジャーナルで焦点が当てられる国際的に注目される事象や議論の論点、トピックなどがいかに変わっていくかである。この *Comparative Education* の歴史を探るにあたって、今までのすべてのバックナンバーを調べ、変遷のパターンをずっと追ってきた。その作業をしているうちに、だんだんそのパターンが読めてきて、60 年代はこのような問題が取り上げられ、70 年代はこのように移っていった、なぜそのようになったのかなどの疑問が出てきて、非常におもしろい作業であった。

上田：60 年代くらいに非常に危機感のあるトピックはどんなものがあつたのか具体的に 2 つ 3 つ挙げていただくと非常にわかりやすい。

クロスリー：私は、次にそれに触れようと思っていた。4 つの段階に分けて話を進めていく。まず、60 年代と 70 年代を一緒に紹介する。これはジャーナルが 64 年から始まったからだ。それから次の 80 年代、90 年代、2000 年以降とその変化のパターンを紹介していく。

これは私の論文の第 1 章であるが、これを読むことによって次に何が来るか知ることになるが、昨日から述べていることであるが、教育以外のその他の領域、政治、歴史、経済を見ることによって、教育が見えてくる。それはジャーナルでも言えることである。

さて、1960 年代を歴史的に振り返ってみると、60 年代に何が起こっていたかちょっと想像していただきたい。高等教育が当時、最も拡大していたということで、高等教育が注目されていた。ちょっとした驚きであろう。他にトピックを想像していただきたい。教育計画である。特に 60 年代、旧植民地がどんどん独立したということで、教育計画がもう 1 つのトピックとなった。関連して、イデオロギーの問題、将来への新しいビジョン、葛藤するパラダイムなどが注目されていた。

60 年代、70 年代を通してもう一つ注目されていたのは、教師教育における役割である。高等教育の拡大とともに、当然、教師教育が注目されていたということが言える。そして、最後のテーマは、方法論である。どのような手法でこの学門を追求していくかということである。方法論については、ロンドン大学のキング教授とホームズ教授が大きな論争をしてお

り、時々バトルと呼んでもいいほどの論争をしていた。その論争は、このジャーナルの中のいくつかの論文にも反映されている。他にも小さなテーマはあるが、これらが強調して注目されたテーマである。ここで質問はあるだろうか。

**質問：**投稿者の論文には何か傾向があるだろうか。たとえば、ヨーロッパに偏っているとか。

**クロスリー：**初期は、ヨーロッパからの投稿が主流であった。いくつかの発展途上国のアングロ系の人々からもあったがわずかで、英語を母語とするヨーロッパ人がやはり主であった。何人かのアメリカ人もいた。

1972年はこのジャーナルにとって大きな変化のある年であった。出版社がカーファックス (Carfax) に変わったのである。カーファックスは今では力のあるパワフルな出版社であるが、*Comparative Education* というのは、そのカーファックスにとって一番最初に出版した学術書であり、カーファックスは非常に誇りに思っている。*Comparative Education* は大手の出版社にとっても、誇りうる出版物であるということができる。72年にもう1つ変化があり、カバーの色がグリーンから金色になった。単に色が変わったということではなく、そのジャーナルのイメージをここに配していくというそのプロセスの中の大きなステップであった。

最初、オレンジの幅が大きかったが、今はこのゴールドが紙面を占めている。これは、*Comparative Education* がゴールドフィールドであるということをして1つのイメージとしているからである。年間いくつかの特別号が出版されるのであるが、一番最初の特集号は1977年であった。先ほど述べたように、70年代はイデオロギー論争が盛んであったので、それを反映して、“State of Art of Comparative Education” という題名がつけられた。1978年、次のランドマークとなる年であるが、ピーターソンに代わって、キングがエディターになった。キング教授はロンドン大学で教鞭をとり、私は長い間彼と仕事を一緒にし、良い友人であった。1979年、昨日引用したローレンスステッドハウスが彼の比較教育学についての論文を出版した年である。比較教育学というのは、私たちの判断を助けてくれるというという引用を昨日したと思うが、そのローレンスの論文が掲載された。

では、80年代に移ろう。コアにある教育以外に80年代に注目された問題は何かだったと思うか。非常に面白いのは、80年代の論文を全部読んでみるとそういったことが浮かび上がってくる。ネオリベラリズムの影響と台頭が第1のテーマであった。第2のテーマは教育における市場の力、第3はアカウントビリティ、そして最後にインターナショナル・トランスファー、国から国への教育の移植であり、これはずっと比較教育学の根底にあるテーマであ

るが、80年代に関しては、そのジレンマ、つまり利益と危険が中心的なテーマになった。他に小さなものもあったが、これらが中心的なテーマであった。

80年代になると特集号は、レギュラーベースになってきて、今述べた4つのテーマ以外に、注目すべきことが80年代には起こっている。他のエディトリアルボードも多分、知らないと思うのだが、この特集号、第1号から29号のリストを作成してみた。これを見れば、今まで述べたこと、それからこれから述べるような時代の変遷を反映するようなトピックの移り変わりが見て取れると思う。(リストを配布)これは、他のボードメンバーもまだ知らないドラフトであり、この研究会の人たちだけが今、知っていることである。

ただトピックを追うだけではなく、もう少しそれを知的に見ていただきたい。いろんなパターンや時代の変遷を追っていただきたい。1986年の特集号では日本のことが取り上げられている。時代を追うごとに、1年間に2つの特集号が発行されるようになってきた。特集号は、販売としても非常に価値のあるもので、別売りになっていて、出版社から直接買うことができる。たとえば、ポール氏の研究に興味があれば、1998年の号などがその例である。南米の教育移植に興味があれば、コーエンが書いている2002年の26号などもある。私自身はこのリストは大変、面白いと思うのだが、皆さんも役立てていただきたい。

80年代のもう1つの大きな変化として高等教育における教師教育の変化がある。教員養成コースや将来の教員候補のためのコースをみると、学級経営や学校財政の運営などのように、より機能に注目したコースが多く提供されるようになってきたことである。80年代にイギリスで起こった変化は世界中に影響を及ぼした。

読者の方にも変化が現れた。高等教育における比較教育が少し斜陽になってきた。そして読者の層も変ってきた。比較教育学の学問的な潮流自身も変わってくる。これが90年代に引き継がれていく。比較教育学は80年代よりはよりリサーチに重点を置いたものになっていく。

同じように90年代の潮流を見ていきたい。90年代に注目されている最初のテーマはコンテキストの変化ということである。コンテキストの変化とは、具体的に述べると、ソビエト連邦の崩壊、新たなかたちでの南アフリカ共和国の再編、香港のイギリスからの独立、中国の台頭など、地勢的な変化を言っている。今述べたことが反映されているのは、たとえば、1990年の特集号を見れば、タイトルはEducational Reconstruction and Transformation in South Africaである。または、香港の独立に関連したものが1997年号にある。次の90年代のトピックはグローバリゼーションである。社会学者のアンソニー・ギデンズは、グローバリゼーションというのは、90年代の概念そのものであると述べている。

90年代の最後のテーマは差異(difference)の概念である。近年、研究者は様々な差異を認識するようになってきているが、そのような概念やその種の感性は90年代のリサーチにはあ

まらなかったことである。そして、今日もそうである。後は、皆さんに考えていただきたいのだが、リサーチというものがかたがたに時代の枠組みやかたちを反映しているかがわかる。

90年代のもう1つの大きな出来事は、91年にパトリシア・ブロードフォードがエドモンド・キングに代わって、第3のエディターになっていることである。キング氏はボードには残った。

2000年代に移りたいと思う。比較研究というものがはっきりと明確な形でジャーナルの特徴として頭角を表した。2000年代にも差異は大きな問題として残り、その中でアイデンティティの概念もやはり大きな問題であり、それと関連して他者 (Other) の観念が注目されている。これは、ポストモダンやポストコロニアリズムの潮流とそれらの社会科学への影響を反映している。

上田：ここ10年くらいを振りかえると、ICT、情報化など、コンピュータの普及が教育や人間の行動様式も変える大きな要因になっているのではないかと思うがこれに関連する論文はあるだろうか。

クロスリー：おっしゃる通りだ。それらは大きな問題である。確かにテクノロジーやICTなどについて多くの論文が書かれているのだが、比較研究をしている論文というのは少ない。逆に言うとそれはギャップなので、皆さんが比較の観点でその領域の論文を投稿されると掲載される可能性が高い。実のところ、2008年にはそのテーマに関する特集号を計画している。

知的な潮流の変化を最も強く反映しているものとしてお勧めしたいのは、2000年と2001年の2つである。1つ目の2000年の号は、このジャーナル誌上、初めてエディトリアルボードが書いたものである。2つめの2001年の特集号は前号の特集号に対する返答というかたちで様々な人、たとえば、マイケル・アップルとか著名な学者がそのレスポンスを載せたものである。これらの2巻は、通常の3倍も売り上げを上げ、国際的に大きな反響を生んだ。時代の精神を反映した特集号である。

時間もないので、ここでまとめたいと思う。2004年に私はエディターになったわけだが、将来的なことを述べたい。日本のことに関しては、まだ出ていないが、2006年の11月号、Vol 42, No.4に、マルチカルチャラルの政策に関して、オーストラリア、メルボルン市、ラートループ大学 (La Trobe University) の Okano Kaori さんが書いている。次の特集号は、今年8月に出るが、テーマは比較研究である。これは、教育学以外の研究分野での比較研究、たとえば、歴史学、政治経済学などである。この号は、昨日、今日と私が話していたこと、まさしくそのことにつながるのだが、いわゆる教育だけでなく、いろんな分野における比較研究が全世界的に非常に注目される分野となっている。イギリスの研究機関や団体がますます

比較研究に注目しているということは、グローバリゼーションの時代の流れを反映しているし、日英教育学会が今年、比較教育学をテーマとしていることも適切なことである。

上田：どんな会議でもそうなのだが、もうちょっと時間があればもうちょっと話を聞けるのだからと思うものであるが、今回もそのような状態で終わらざるを得ないことを残念に思う。非常に細かくジャーナルのトピック、背景、あるいは時代との関わりなどでたくさんのことを教えていただいた。個人的にも勉強になったという印象を持っている。昨日、今日と非常に暑い中、講演をしてくださった先生に対して拍手で感謝したい。

資料 『比較教育学』特別号（1964-2004）タイトル一覧

1	13(2) 1977	Comparative Education -its Present State and Future Prospects	Nigel Grant
2	14(3) 1978	Policies and Politics in Education	Edmund King
3	15(1) 1979	Unity and Diversity in Education	Edmund King
4	15(3) 1979	Disparities and Alternatives in Education	Edmund King
5	16(3) 1980	Into the 1980s. Education, Decision and Development	Edmund King
6	17(2) 1981	Education and Development in the Third World: a critical appraisal	Paul Hurst
7	19(2) 1983	Education and the Diversity of Cultures	Nigel Grant
8	20(1) 1984	Education in China	Edmund King
9	22(1) 1986	Education in Japan	Edmund King
10	23(1) 1987	Sex Differences in Education	Patricia Broadfoot & M.B.Sutherland

11	24(2) 1988	Education and Minority Groups	Nigel Grant
12	25(3) 1989	Cross-national Attraction in Education	David Phillips
13	26(2/3) 1990	Work Perceptions of Secondary School Teachers: International Comparisons	Pam Poppleton
14	28(1) 1992	Educating the New Europe	Edmund King
15	29(3) 1993	Education in the South Pacific	Michael Crossley
16	30(1) 1994	Edmund King's Contribution to Post-compulsory Education: an international review and appreciation	Vivian Williams
17	31(2) 1995	Educational Reconstruction and Transformation in South Africa	David Johnson
18	32(2) 1996	Comparative Education and Post-modernity	Robert Cowen
19	33(2) 1997	Education and Political Transition: implications for Hong Kong's change of sovereignty	Mark Bray & W O Lee
29	34(2) 1998	Comparative Education in Education Policy	Stephen Ball
21	35(2) 1999	Lifelong Learning and the Education of Mature Adults	Karen Evans, Peter Jarvis & Edmund King
22	36(2) 2000	Nigel Grant Festschrift	Thyge Winther-Jensen
23	36(3) 2000	Comparative Education for the Twenty-first Century	Michael Crossley & Peter Jarvis
24	37(4) 2001	Comparative Education for the Twenty-first Century: an international response	Michael Crossley with Peter Jarvis
25	38(3) 2002	Democracy and Authoritarianism in Education	Lynn Davies, Clive Harber & Michele Schweisfurth
26	38(4) 2002	Latin America and Educational Transfer	Robert Cowen
27	39(2) 2003	Indigenous Education: new possibilities, ongoing constraints	Stephen May & Sheila Aikman
28	40(2) 2004	Postcolonialism and Comparative Education	Michael Crossley & Leon Tikly
29	40(4) 2004	Philosophy, Education and Comparative Education	J Mark Halstead & Terrence McLaughlin

(なかじま ちえ：京都文教大学)